傍観少女の異世界観察記

紗姫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
傍観少女の異世界観察記

【Ｎコード】
Ｎ６４２７Ｔ

【作者名】
紗姫

【あらすじ】
異世界に飛ばされた一人の少女　澪禍が行く。
方向性があるのか無いのかよくわからないお話。
主人公最強物語みたいな？かんじなんだって
もうこれあらすじじゃないね（笑）

キャラクター設定（前書き）

何となく書いてみた

キャラクター設定

香乃澪禍（こうのれいか）
本作の主人公
能力&ステータス
・闇を司る能力
・かんしょうを司る能力
・邪を司る
・魔を司る
一種の変態。アニヲタかもしれない
シリーズでの鍵になる人

橘春乃（たちばなはるの）
能力&ステータス
・暗器を統べる能力
・魔王の邪眼
・魔剣ラルアドラ
運動神経抜群の女の子
ある意味一番鬱になりやすそうな人

日向夢乃（ひゅうがゆめの）
勇者。春乃に敗れて死亡
元々の世界では生徒会長をしており、わりと不幸体質。
ステータス
・神の祝福

・聖剣アルカルトネ
・妖刀正宗
・精霊達に好かれる体質

ラウア
風の神。澪禍の師。
元々は神獣で、神速の神狼とも言われるほどのもの。
人化できる
ステータス
・風を統べる能力

ユードリア
光の大神。澪禍によって死亡
神の統率者の一人
ステータス
・光を司る能力
・輪廻転生を統べる能力
・正を司る能力

まえがきみたいなやつなんじゃない？たぶん

単純に言うと一人の女の子が異世界へとぶっ飛ばされるお話。

チートです。かといって戦闘表現なしかも・・・。

みたいな？感じなはなし。

基本的にやる気なんて無いぐーたら食っちゃねが大好きな一人の女子がいきなりぶっ飛ばされて

「まぁ。別になんでもいいけどさ。・・・なんでテンプレじゃなかったの？」

みたいな独り言をぶつぶつ言いまくるお話。

恋愛？なにそれおいしいの？みたいなことをほざく意味不明で少女が行きます。

注意！主人公最強物語とか苦手な人は注意してくださいな

基本的なんか変態しか出てこなそうな小説です。それでもいいならどーぞ

まえがきみたいなやつなんじゃない？たぶん（後書き）

変態ってすばらしい！！！
超不定期更新です
もしかしたら作者これかいてることもわすれちゃうかもね（笑）

異世界へ飛ばされたんだって（前書き）

第一話ですね

異世界へ飛ばされたんだって

気がついたらお花畑の中にいた。

「はぁ？いみふだわーー」

私は確か西〇維新の一番くじを買いにいってD賞当たってよろこんでー・・・・・

家に入るために家の玄関をあけて・・・。

なんで玄関の扉開けたらお花畑なわけ？

おかしいでしょ？確かに私はテンプレいいなーとか望んでたけどさ

そうだ後ろに玄関扉があるに違いない！

・・・。

なかった・・・・。

へこむわー。

でもその代わりに変な冊子てきな何かが落ちていた

なになにー？

～神様からのおてがみ～

あなたは１０２３人目の異世界へ飛ばされたひとですー

おめでとうございますー

そのままでは生き残れないだろうからチート的な能力あげますー

がんばってね♪

私たちの暇のためにも

そうそうこの手紙は読んで１０秒後に爆発しますー

おきおつけてー

・・・・・。

うそーん
まさかの異世界へ飛ばされたって言う落ちですか

ありえねーよ
最悪だわ

前回引き損ねた方こんかいひいてうひゃうひゃしてたのに
ひいた景品の入った袋もどっかいったし・・・・

手紙？紙飛行機作って飛ばしました（笑）
もういやだ。現実逃避したい

いつもの私なら喜んでるけど今回は違うよー
喜ばないよー
返せ私の愛しい愛しいとがめと七実

くそう
もうどうでもよくなった
おなかすいたし民家でも探しにぼちぼち歩いてみよう
きっとどっかにあるだろう

って言うかチートてきな能力ってなによ？
意味不明だわ
なに？魔力減らなかったり不死身になったり思うだけで何でも出来

たりするやつ？
そんな能力だといいなー
まぁいいや
民家探そう
まじではらへった

民家ねぇよっ！？
おかしいだろ人すんでねぇのか？
もしかしてあれ？日ごろの行いが悪かったから？
友達の胸もんだり、おしりさわったりしたからか？
お日様傾かないでー
まじでこんな森の中で真っ暗とか私に死ねとでも言うのか？
こわいからさー

・・・。
うそーん・・・・。
なんか真っ白くて紅い目をしたオオカミさんこっちみてるよー
食われる？まじで？
日本に生まれるとこういうときにたいへんなのねー
（どこにいてもきっとにたようなものだと思うけど）

よってきた・・・
まじで死ぬのかー

「おい」
？？？？？？
しゃべったーーーっ！？
「ひとつ言うがわたしはお主を食べるつもりはないぞ」
「えっそうなの？」
てっきり勘違いをしていたようだ。よかったー食べられなくてすむ
「・・・・。なに？」
「お主はここでなにをしておる？」
「えっと・・・。民家の捜索？」
「ここに民家はない。なぜならここは魔獣の森だからだ」
「魔獣？なにそれおいしいの？」
「・・・。美味しくはない。食べれるがな。」
「んじゃあなたも魔獣なの？」
「いや違う。わたしは神獣だ」
なんかすっごいおおかみさんにであった気がする。
「で、お主行くあてはあるのか？」
「ないね。だから民家さがしてたんだもん」
「そうか。なら私のところに来るか？」
え？どこから見てもオオカミさんのところにですか？
でもまぁ比較的安全そうだし。なんか魔獣の森って明らかやばそうなところだからねー
「おねがいします。」
綺麗な土下座で私はお願いした

異世界へ飛ばされたんだって（後書き）

変態でてこないねー
もしかしたらほんとに出てこないかもー
まぁいいけど

神獣の家って意外と大きい（前書き）

今回は少しシリアスっぽくなります。
なんか最初に書こうとしたところからどんどんと離れていってます・・・。
変態でるのかねぇ・・・。

神獣の家って意外と大きい

オオカミさんについて行ったら目の前には大きな大きなお屋敷があった。

「着いたぞ。ここがわたしの家だ」

すると屋敷からメイド？が現われて

「お客様を客間におつれいたしますわ」

なんていって私は客間に通された

客間は広くそして派手すぎずに落ち着いていてそれでも威厳に満ち溢れるような部屋だった

「広いなー。」

そんなことを私はつぶやく。どこの誰かはきっとつぶやくならツイッターでもしなさい。なんてことを言ってそうだ。

「では、わたくしは失礼いたしますわ」

といってメイド？は部屋を出て行った。

ていうかあれってほんとにメイドなのか？あきらか上から目線だったような・・・・

「待たせたな。」

と、いきなり部屋に入ってきたのは白銀の髪をなびかせ紅い目をした少女？だった

「・・・・・。どちらさんでしょうか？」

とりあえず聞いてみる。
お主にいっておらなんだか・・・。わたしはおぬしで言うおおかみさんだ。」
えぇぇぇぇっ！？
あの神獣のおおかみさん？うそだ。うそに決まってる。そんなどこぞのファンタジーじゃあるまいし・・・

「なにか変なことを考えていたようだな。わたしは名をラウアという。二つ名は『白銀の神風』という。まぁこんなに変な二つ名はつけられてもうれしくもないが・・・。もっとこう・・・かっこいいやつがよかったが・・・。」
「私は香乃澪禍ですー。二つ名なんてありませんー。」

ついでによく友達に変わった姓だといわれる。なんでご先祖様はこんな名前つけたんだろう・・・

「そうか。お主にいきなりだが質問させてもらう。お主は異世界人だな？」

！！！！！！

なんだこの人！（人じゃなくて神狼）
何も言ってないのにいきなり当てやがった！！！！

「理由は2つ。まずこの森に人間はこない。居たとしてもそれは頭のいかれたおかしいやつだ。もうひとつはおぬしの髪と目の色だ。この世界では黒髪に紅い目などまず人としてありえん。黒髪はまず珍しい。居たら帝国に連れて行かれる。紅い目は我々神獣や魔獣などの人から外れたものだ。人間で紅い目をしているのは異世界人つ

まりは神の悪戯により連れてこられた者でしかありえんのだ」
え？え？え？私の目が紅いだと？私は生まれたときから黒い目だ。
黒髪はわかるけど。私はそもそも紅い目などしていないはずなのだ。
「鏡をみせてくれませんか？」
するとラウアは鏡を出してきて渡してくれた。

！！！！！
本当に目が紅い。真紅のようだ。
「お主気がついてなかったのか？」
ラウアが心配そうに聞いてくる。
「うん。・・・・・。」
私は力なくうなずく
まず神の悪戯って何だ。もしかして私は元の世界へと返ることは出来ないのだろうか。
ラウアは神獣だ。なにか知ってるかもしれない。
でもさすがに今聞くのはあれだ。まだ昼なのだから夜にでも聞くこととしよう。

「ねぇ。ラウアさん。なんで黒髪だと帝国に連れて行かれるのですか？」
それが聞きたかった。黒髪だと帝国に連れて行かれる・・・。
それはつまり殺されるか奴隷にでもされるのか？
私はそこが心配になった
「――――。黒髪はな・・・。人間ではありえないほどの魔力や能力の持ち主のことを表す目印のようなものだ。たいてい黒髪のものは生まれてからすぐに死ぬ。死ななくとも、病弱でお主のように顔色

もよくない。――――だからな。人間での黒髪は大きすぎる力の代償に体に大きな負担がかかる。それで生きていれば国にとってそれはそれは有益なものとなる。国からしたら最高にいい軍事兵器だ。魔力や能力があるというのはまぁ普通の人間にもあるものはあるが黒髪のものとは桁違いに弱い。だから見つかれば即帝国によって厳重に管理されるのだ。」

それを聞いて私は血の気が引く。まさに私はその言葉の通りなら見つかれば厳重管理なんかじゃすまないかもしれない。何たって紅い目はまず異常の証なのだ。国が欲しがる大きな宝物じゃないか。

「まぁ。幸いにも言語は通じるのだ。しばらくはここに居るといい。ここなら人も来ないし、おぬしにとってはよい隠れ家となろう。」

そういわれて私は元気が出た。

そうだ。しばらくはここにいればよいのだ。その間にらいラウアさんに文字の書き方や勉強を教えてもらおう。教えてくれるのなら魔術と体術もおしえてもらおう。

私は安心すると共に睡魔に襲われた。

「寝たか。・・・。まだこんなにちいさな子だというのに・・・。神はいったい何を考えてらっしゃるのだ・・・。娯楽でもしてよいことと悪いことがあるだろうに。」

このときまだ私は気付いていなかった。

今現在ラウアがいったちいさな子とは要するに幼児のことを表す。

要するに私は体が幼子とおなじぐらい・・・または４．５歳ぐらいなのだ。

それに彼女が気付くのは目を覚ましてから・・・。ということとなる。

神獣の家って意外と大きい（後書き）

誤字、脱字などがおありでしたら言ってください。

感想なんかくれると作者はうれしくなって飛び跳ねます

ラウアのお勉強教室（前書き）

もう変態ってワードをけそうかな・・・
変態でてこないきがする
っていうか消しちゃおう

ラウアのお勉強教室

起きたら朝だった。
いったい何時間寝れば気が済むのだろうか。
起きてまず私は服が変わっていることに気付きたぶんラウアさんかメイド？さんが着替えさせてくれたのだろう。とりあえず起きたのだからラウアさんに会いに行こう。

「おはよう。澪禍」
「おはよー。ラウアさん」
「それにしてもお主は体の割には精神年齢が・・・上過ぎないか？」
「・・・・はい？え？体の割り？」

近くにあった姿鏡で自分の体を見る。
昨日言われた通り、目は紅く髪は漆黒の黒。からだは３．４歳ぐらいのものだろうか？
・・・・。え？３．４歳？
私中学生でしたよー？

「・・・。まぁ別によいが。」

いいんだ・・・。意外とラウアさんは物事に無関心だったりするのかもしれない。
それにしてもラウアさんは美少女である。女の私だって言うのだから他の男が見たら絶対に一目ぼれとかしそうである。まぁ私は男じゃないのでわからないが。

「ラウアさん。私に文字と学問を教えてくれませんか？」

「文字と学問？学問とは計算や歴史、文語などのことか？」
それ以外にいったい何があるのだろうか
まずないと思う。
「やっぱりおぬしの精神年齢は異常・・・。まぁよいか。確かにそうだな。異世界からきたのだ、文化や言語も違うし歴史などはもう完全に違うのだったな。よし。わたしがみっちりと教えてやろう。」
みっちり・・・。
なんかすごいいやな予感がする・・・。こういうときのこれはよくあたるんだ・・・。

それからほぼ毎日朝から晩まで私はみっちりとラウアさんにおしえられた。
なんかすっごく疲れた。ラウアさん張り切りすぎだと思う。
とにかく私が頼んで一ヶ月がたとうとしていた。

「文字は一日。数学は7日歴史は・・15日か。お主天才か？そうか天才なのか。そうかそうか」

ラウアさんキャラが崩壊しかけてます。
ついでにその一ヶ月でいい情報が手に入った。
なんとあのメイド？さんの名前をついに知ることが出来たのだ！
名前をユーリ＝アーノルド＝レイチェル
めんどくさいのでユーリだけ覚えておこう
ていうか、貴族の人じゃないの？いやそれ以前にこの人・・・人間か？
ラウアさん人間居ないって言ってたはずだし・・・。

私の謎がまたひとつ増えた。

そして、一番大きかったのは、元の世界に帰ることが出来るのかということだった。

ラウアさんに聞くとこたえは

否だった。

神の悪戯と呼ばれる現象は、神が自ら望んでするため、神をも超える力・・・。この世界の神と自分が居た世界の神すべてに勝てるぐらい力がないと無理なんじゃないかということだった。それ以前にこの世界では、召喚魔法はあるけど、こっちから送る魔術はないそうだ。

だから私は帰ることを諦めた。

この世界に居ても十分楽しいじゃないか。第一私は神に勝とうとは思わない。

そんなことをするぐらいならこっちでのんびり暮らしてるほうがよっぽど楽しいに決まってる。

大体、神が送ったんだからおそらく向こうでの私の存在は消されているのだろう。

だから――私は――――

「澪禍。お主街に行かないか？」

「はい？私がこの姿だと危険じゃないですか？」

「そのことに関してはわたしに妙案がある。単純な話だ。私は一応コレでも神の端くれなのだ。髪の色、目の色ぐらい私だって変える

ことが出来る。」

そういうとラウアさんは自分の目の色と髪の色を変えて見せた。
「なるほど。でもそれって時間制限とかあるんじゃないですか？」
「ん？それはない。なんてったってこのわたしがじきじきにおぬしに術をかけるのだ。
よほど無茶な力を使わん限り破れたりはせんよ」

無茶な力・・・。それは要するに魔力や能力のことなのだろうか。
私はとりあえず先に学問を優先したため、まだ魔術や体術を教えて欲しいと頼んではいないが万が一破れたりすればどうなるのだろうか・・・

「それにお主がわたしから離れん限り破れる心配はない。」

それを聞いて安心した。ラウアさんから離れなければいいのだ。
離れない限り大丈夫なのだから、まず破れる心配はないだろう。

「出発は1週間後にしようか。それまで時間があるからおぬしは何色にするか決めておくのだぞ？3日後に聞くからな。」
そういうとラウアさんは自分の部屋へと帰ってしまった。

「あ・・・。文学の勉強の続き・・・。」

どうやらわすれらされてしまったようだ。

もう外を見れば夕方だった。

「今日はここまでにしよう・・・。」

と、私は今日の勉強を切り上げた

ラウアのお勉強教室（後書き）

やっぱり少しシリアスっぽくなるのかも・・・。

誤字・脱字があればいってくださいな

感想くれると作者はちょっとやる気がでるかも

自分で容姿を決めるって・・・まぁいいけど（前書き）

・・・。

ちょっとキャラ紹介的なの作ってみようかな。

まだ三人しか出てないけど

自分で容姿を決めるって・・・まぁいいけど

次の日

私は自分の容姿について考えていた。
他人から言わせれば容姿はいいほうに入るらしい。

まぁ、そんなお世辞もらってもうれしくねーよ。みたいな気もするがそれでもかわいいといってもらえるのは光栄なことだと思う。

私はラウアさんから言われたとおりに
自分の髪と目を何色にするか考えていた

「髪の色が別にいけるのならよかったんだけどな・・・」

髪の色が決まっているのなら目の色を髪の色に合わせる・・・。というだけで済む話なのである。

すでに頭の中にあった候補はこの通り
1、髪→紫　目→紺
2、髪→紺　目→琥珀色
の二択だ。

もうこの二択しか頭から出てこない。

どうも私は髪の毛がピンクとかに耐えられなかったようだ。

まず頭からその言葉の頭文字すら出てこなかった。

「あーあ・・・。」

今日はラウアさんのお勉強会はお休みなのだ。

暇だなぁ・・・と思う
いつも勉強に忙しくてこんな風に時間を持て余すことなんてまずなかったのだ。
だから・・・暇だなぁと思う。
本でも読めばいいじゃないかと思う人も居るだろう
でももう読む本すらないのだ。
困ったことだ

おっ・・・そうだ。お昼寝をしよう。
そうだそれがいい！

ということでお昼寝をすることにした。

起きたら見事に朝でした。

うそーん・・・・。
私どんなけ寝てるんだ
確かに寝るのはとっても楽しいことだし、とっても幸せだと思う。
でも・・・・。あぁ。そうか。そういうことなのか。
単純な話だ

体が子供だから、たくさん寝ることが出来るんだ・・・。
あぁ。ひまだなぁ・・・
ん？朝なんだから朝食をとりにいいけばいいのか
ということで私は朝食をとりにいった。

それからラウアさんに言われていた3日間がきて

「澪禍。何色にするかきめたか？」
「ラウアさん。私、髪の色を紺に目の色を琥珀色にしてください。」
「わかった。おまえが望む色を頭の中で考えるんだ」

なんかあっという間に終わった。
ちょっと考えるだけでよかった。

鏡を渡されて確認する。
顔立ちは同じだが、色が違う。少し違和感を感じるが、別に問題ない。慣れればいい話だ。
ラウアさんににこっと笑いかける。それを見てラウアさんも安心したようで、
「気に入ったか？」

私は笑顔でうなずく。
「そうかそうか～」
なんか頭をなでられた。くすぐったい。それにまたキャラ崩壊してるし。

まぁ。これで私は帝国に見つからなくてすむのだから安心してよいだろう。
町に行くのがとても楽しみだ。
そういって私の一日は終わる。

自分で容姿を決めるって・・・まぁいいけど（後書き）

誤字・脱字等がおありでしたら言ってくださいませ
感想をくれると作者はテンション上げ上げになって踊りだします

町に行こう（前書き）

ｌｅｔ'ｓ　町

町です町。

主人公のチート能力は学園偏で発揮されますー

町に行こう

ラウアさんによるとこの町はルーダラス大陸で2番目に大きなハルベティア帝国の中でも2番

ルーダラス大陸には5つの国があり

一番大きな国は大陸の中央にあるルーダラント皇国
二番目に東のハルベティア帝国が入り
三番目に南のラスドラシア国
四番目に西のレンティアーラント国
五番目に北のアークシュレアド国があるのだそうな

ハルベティアは古くから聖なるものまたは神聖なものが住まう土地としてあり、それゆえに魔術が発達した国なのだそうだ
（どうやらここの魔術は精霊などの神聖なものからの加護をうけて使えるものであり、魔物たちが使うものは瘴気を力の根源として扱うものらしい）

ルーダラントは商業の国や武の国として有名である。
ラスドラシアは観光地として有名であり古くからの一族、竜人族などがたくさん住んでいるそうだ
レントアーラントは魔術と科学をあわせた力などによる魔工具をたくさん生産しており、ハルベティアと提携をくんでいる
アークシュレアドは魔物の住む土地としてあまり人はおらず、唯一の町アルバレアは瘴気から身を守るべく結界を作ることに長けた者たちが住むのだという。

解説終わり

いま私たちの居る町の名をモルガートといい
なんだかにぎわっていた

「にぎやかですね。」
「いつもはもう少し静かなのだがな・・・。なにかあるのか？」
ということで宿のご主人に聞いてみると
「今日から一週間帝国からお姫様が来るのでございます。」
「何番目だ？」
ラウアさんが聞くと
「四番目の姫でございます」
「なるほど、だからこんなにぎわっておるのか」
後から聞いた話だが四番目の姫（通称　四姫）はすべてをとりこにするぐらいに美しくその美しいお姿を人目みんとこの町にたくさんの人が来ているのだそうだ。

わたしも一度でいいから見てみたいと思った。

ラウアさんいわく

「めんどくさいときに来てしまった」らしい

ラウアさんによれば、この国の王族は何故か聖なるものかどうかを見分けることが出来るらしく、どれだけ巧妙に変化や魔術で姿を変えたところですぐに見つかるのだそうだ。

確かにラウアさんからすれば、めんどくさいのだろうと思う。

私もそうだ。

本来のあの黒髪に紅い目であることを見破られてはひとたまりもない。と思う。
これから生きていくなかでそんな能力の持ち主がいないことを私は願おう。

「ラウアさん。私たちが町に来た理由って何ですか？」
「衣服に買い揃えにお前のその膨大な魔力を抑えるものを探す」
「魔力？？？」
「いまの何もしていないお前だと魔力が垂れ流しになるのでな。魔力を持たない人が魔力酔いしてしまう」
「あぁ。そうなんですか。」

んん？ということは今も絶賛垂れ流し中なのか？

「えっと・・・。もしかして私いま魔力垂れ流し中ですか？」
「いや。私が抑えてある」

ラウアさんさいこーだわ
なんて気が利くんだろう

「お前の膨大な魔力が垂れ流しだと変な者がよってくるからな」

理由はそれですか。浮かれてた私はいったいなんだったんだろう。

「宿に入るぞ。」

空を見ればもう薄暗くなっていた。

今日はお姫様を見ることが出来なかったけれど

明日はお姫様をみることができるかな。

そんなことを楽しみにしながら、私は宿の中に入ってその日の晩を過ごした

町に行こう（後書き）

誤字・脱字などがあればいってくださいませ。ご主人様感想をくれると私はとってもうれしいな

昔話ってなんかすき（前書き）

・・・。不定期更新だよっ♪
今までがただ単にひまだっただけなんだからっ

昔話ってなんかすき

朝

「おきろ。なにやら外が騒がしい。」
そう言われて身体を起こすと確かになにやら外が騒がしい。
私はどうして騒がしいのか気になった。
「ラウアさん。そとを見に行きましょうよ」

外に出るとお祭り騒ぎだった。
「今日は四姫様が外に出てお散歩してらっしゃるそうです。それだけでこの人だかりなのですから姫様のご結婚式ではそれはもう――――」

「うおーーーーっ!!!!好きだーっ結婚してくれーっ!!!!」

「すさまじいですね・・・。」
「そうですね。」

宿の主から話を聞いているとそんな叫び声が聞こえてきた

どこまでがんばってもそれだと全然姫様振り向かないだろうに・・・
むしろ逆効果なきがする・・・

ラウアさんは外を眺めながら何かを見ていた

「ラウアさん?」
「・・・。あぁ。すまん。で、なんだ?」

「どうしたんですか？ボーっとして」
「あぁ・・・。少し昔のことを思い出していた。」

話を聞くと

それはこの国もどこの国も争いをしていた時期だったのだという
そんななか、ラウアさんは1人の少女に出会ったのだそうだ。

その少女はいまの帝王の先祖に当たるらしい

その少女は泣いていた。

どこにいっても1人だけ仲間はずれ

「みんなが私をいじめるの」と少女は泣いていた

ラウアさんは、その少女に声をかけたのだという
その少女は黒髪で紅い瞳だったそうだ

ラウアさんはその少女に魔術を教え、その少女は自らの姿を変える術を手に入れ
ラウアさんのもとを去り、戦場で『瞬災の魔女』と呼ばれ、国家を築き上げたのだそうだ
その少女には能力があった。それが万物を聖なるかどうか見分ける能力なのだそうだ
細かく言うと今の王族でも、どうやらこの能力は使える人が決まっているのだそうだ
それが王族の姫君なのだという

「私を拾ったのもそれが原因ですか？」
「まぁ。そうともいうな。でもまぁ・・・。こうやって話すことが出来るのだからよしとしよう。わたしに拾われてなかったら、今頃おまえ食われてるか、実験材料の二択だぞ？」
「それはいやですね・・・」
「さて、裏から出ておまえの・・・いや澪禍の魔力を抑えるものと、衣服を買いに行くとしよう」
「はいっ！」

裏口は表通りとはちがってやはり空いていた。ちょくちょく人を見かけるが、それも極わずかだった。

「ついたぞ。ここはわたしの知り合いの店だ。普通の者なら見ることも触ることも不可能なぐらいに店は結界に覆われているから気をつけろよ。触ると黒焦げになる。」

この町の七不思議になりそうだな・・・。と思っているとラウアさんに引っ張られて、結界の中に連れて行かれた。

「ひさしぶりだね～。ラウアーっ！！」
いきなりの先制攻撃だった。なるほど、ラウアさんが先に私をいれたのはそういうことか

「！！！！！。・・・・・・・・。ラウアじゃない・・・・？」
なんか凄い驚いてる。
「？？？？？。おおっ？おおおっ？こっちがラウアかーーっ！！」

ラウアさんに飛びつこうとしてラウアさんに蹴られるかわいそうな人だった

「はじめましてだねっ♪わたしは精霊のハウル・レイスタードだよっ」

神獣の次は精霊でした

昔話ってなんかすき（後書き）

誤字・脱字など見つけたらいってねっ♪
わたしてきにはコメントとかくれるととってもうれしいよっ♪

愉快なひと・・・なのかもしれないね（前書き）

・・・。短いね・・・

どうにかして長くかけないものかな・・・

愉快なひと・・・なのかもしれないね

ハウル・レイスタード

それは、王族の起源にまでさかのぼればわかることなのだが

ひとりは精霊とよび

ひとりは鍛冶屋ともいい

ひとりは――――――――ただの凡人だという

まぁ、このなかで正解は――――――――――まぁ、すべてなのだが

単純な話――――――――職人である。

「とりあえず、ハウル。わたしはおまえに澪禍の衣服を作ってもらいたいのだ。」

「えー。いやだ」

「そういうな。つくれ」

「なに？それは命令なのかなっ？」

「そうだ。命令だ。つくれ。そうだ。作ってくれたらおぬしの壊れた精霊石をなおしやらんこともないぞ？」

「まじですかっ！！受けます。わたしはその仕事を責任を持って引

き受けましょうぞっ！」

なんか凄いやり取りをしている
こっちから見れば意味不明・・・・。の一言で終わる
だいたい精霊石って・・・壊れたら精霊さん死ぬでしょ？

「んじゃ。澪禍ちゃん。こっちに来てくれるかな～？」

そうだ。私は他人から見れば単なる幼女なのだ。
当然子ども扱いをされる・・・・のもまぁあたりまえなのか・・・。

「そうだ。ラウア、わたし聞きたかったんだけどこの子”普通”じゃないよね？」
「！！。おぬしにもわかるのか？」
「わかるよー。なんていうか。異世界人？久しぶりにみたね。あの女の子以来じゃないのかな？」

あの女の子・・・今の王族の先祖に当たるこのことなのだろう

「まぁ。そうなるな。まだわたしには確信はないが、まぁ異世界人ということには間違いはない。ただ、その世界に居た頃と今の姿ではどうやら外見が違うらしい。」

いつの間にきづいてたんだ！！！
ん？あぁ。目のことか？

「大幅に外見・・・。いや年齢的なものが違うようだ。違わなければ天才じゃないのか？」
「なんか凄いものを拾ってきたんだねー」

拾ってきた言うな
ちょっと傷つきます

「大変だねー。今はこの髪と目の色だけど、あれでしょ？黒髪に紅い瞳なんでしょ？」

なんだか凄いばれてます

「そうなる。あの少女は異世界人だったのかがわたしは気になっているがな」
「もし異世界人だったら凄いねー。ははははは」

ハウルさんは愉快な人である
と、思う。

そしてなかなか測ってくれない
いったいいつになったら測ってくれるのだろう・・・

もう大丈夫なの？（前書き）

次回からは学園偏です。
（のつもり）
作者は今とっても文章構成能力がないことに苦しんでいます

もう大丈夫なの？

ハウルさんに服を作ってもらった。

と・・・・。言ってもいわゆるブラウスにスカート・・・・。

まぁ。この世界にはないらしいけど。

「じゃあ。また気が向いたらくる。」

「そんなこといわずにきてよー」

「じゃあな」

ハウルさんと別れて今はまた裏通りにいる。

表通りには四姫が居るから通るとたいへんまずい（ラウアさんが）

「次は・・・・・。魔力を抑えるやつを買いに行くんですよね？」

「そうだ。今おもい出したが魔力を抑えるやつ・・・性格にはリミッターか。それを買いに行く。まぁコレもまたわたしの友達に作ってもらうのだが・・・」

「えっと・・・・。普通の人じゃだめなんですか？」

「お前の魔力が大きすぎでつくれない」

「・・・・。あ、そうですか」

おおきすぎる・・・・・。だそうだ

これが、無責任な神様が与えたチートなもののひとつなのだろう

もしかして・・・あれか、メガンテとか使えるのか？

「もう歩くのだるいからテレポートする・・・」

ダウンはやっ！
えええ？あんた神様の一種でしょ？
もうちょっとがんばろうよ・・・

「！！！！！！！！！！！！！」
「テレポ完了」

完全なるショートカット
（作者が書くのが面倒なのではぶいたて、テヘッ☆ミ」
もう作者やる気ナッシングだなおい・・・

「はいるぞー」
「・・・・・」

しーん

「いないのかー？」

机を見るとこんな紙があった

～ラウアへ～
めんどくさいからお前が来るのを予知してつくっておいた
勝手に使え。

読んで三秒後に爆発するからキヲツケロ♪

「・・・・。」
さすがだラウアさん
読んだ瞬間水につけた
「んじゃぁ。帰ろうか」
「そうですねー」

こうして帰ることとなった

もう大丈夫なの？（後書き）

だるいー

澪禍、屋敷を出る（前書き）

学園偏突入！
ですよ
あんまり主人公チートらしさがでてないね？

澪禍、屋敷を出る

あれから5年の月日がたった。

今わたしの年齢は１０歳。（もう少しでだが）
不便だったので、この世界に来た日を誕生日とし、そのときに私は４歳だったことにした。

今の私の容姿は１０人いれば１０人ともが間違いなく認める美少女だ。
私的には、１０人いれば5，６人が認めるぐらいがよかった。（この世界に来るまでそうだった）
ついでにこの世界に来たとき私は１４歳だったため精神年齢が１９歳なのが悲しい。
精神的に老けてることとなる。

「ラウアさん。私、旅に出てみます。」

私はそうラウアさんに言った。
ラウアさんにはとてもでは言い表せないぐらいにお世話になった。
魔法に武術に精霊術、そしてこの世界に関する知識も。
それでも、私はこの世界を、自分がこれから生涯住む世界を、見てみたくなったのだ。

「いいぞ。お前のすきにすればいい。わたしはお前にお教えられるだけのことはした。もとよりお前にはその才能があった。だから行

ってこい。お前は神々に認められた神子なのだから。」

神子？なにそれ？初耳なんですけど

「あぁ。えっとな。上のものから連絡があってな。お前は神に匹敵する力を持つものだ。まぁ人間はそんなことをしらないから気にする必要はない。というよりわたししか知らないことだ。だから、特に気にする必要のないことだ。お前は旅にでも学園にでもなんにでもしてだな・・・。ともかくお前の好きなことをすればよい。」

「じゃあ。いってきます」

「いってこい。あ。ついでにわたしは神界に帰ることとしたからもういなくなるけど気にするな」

扉を閉めると同時に屋敷がなくなった。

「・・・・。あのメイドさんいったいなんなんだろうか。」

それが私の心に残る生涯消えない疑問になるだろう。

「まぁいいや。とりあえず町に行こう。」

すると空から紙が降ってきた

～神様からのお手紙ｐａｒｔ２～

おひさしぶりだね～

ラウアに連絡したのも私だよ～

その世界には異世界人が今現在3人いるよ。
まぁ。君を含めてだけど。
でもきにしないで、異世界人でも君のようなチートはいないから。
（2人とも君の知り合いだよ）
その2人は今頃学園に入る準備をしてるね。
君も行きたかったらいけばいいよ。
入学試験はいたって簡単。魔力の量ぐらいだから。
場所は王都ハールト
君の転移魔術でいけるようにしてあるからね

この手紙はあと3秒で爆発します

（何だこの手紙っ！てかこの世界ではコレがはやってるのかっ！）

手紙？モチロン存在から抹消しました。
これってあきらか行けってやつだよね・・・・
いく当てがないからいくけどさ

（転移魔法、テレポート）
想うだけで魔方陣が自分の下に現われ、私をその場から移動させた。

着いたのは、王都に入るための検問をうけるための関所の前・・・・
から数十メートル離れたところ。
（入るのお金いるかなぁ）
まぁ、ラウアさんからのお小遣い貯金してたからいいけど。
今の現金は金貨１０枚

この世界は共通の硬貨だから楽だなぁ・・・なんておもったりした
ついでに
銅貨１０枚で銀貨１枚
銀貨１００枚で金貨１枚
金貨１０００枚で白金貨１枚だ

「まぁいいや。行こう」

やっぱり検問に引っかかった
「何か身分を証明できるものの持っているか？たとえばギルドカードとか」
「ないです。田舎者ですから。」
「そうか。なら銀貨１０枚払え」

銀貨１０枚って高すぎだろ・・・
まぁ払うけど
払うとふつうにとうしてくれた

「とりあえずギルドにいってギルドカードをつくるか・・・。んーでもあの兵士？さんは学生証でも身分を提示できるって言ってたしなー。めんどくさいから学生証だけでいいかな・・・。余裕が出来たらギルドカードをつくろう」

「試験会場はこちらですー」
そう叫んでる女の人がいた。がんばってるなー

看板に『国立ハルヴィーン学院試験会場』ってかいてある
いまきになったけど、この世界の魔力の基準って何なんだろう
そうおもって、ふと、みあげると

現在の順位
１位　３８００００
２位　３５００００
３位　３０００００

いかもろもろ

基本３００００００？

まぁなんでもいいや
そうおもって結局放置した。
結局それが目立つ原因となるのだけれど

澪禍、屋敷を出る（後書き）

らんらんるー

もう古いけど今コレが作者のマイブームになりつつあります

番外編！～その一～、っていっても本編にかかわるんだよね。容姿とか（前書き

番外編書くのたのしいー

番外編！～その一～、っていっても本編にかかわるんだよね。容姿とか

屋敷を出て、澪禍は考えていた。
この容姿を変えたらどうなるのかなーと。
さすがに、この容姿をずっとしているのは・・・
というより変えたくなった。
どうやら白髪は珍しくないようだ。時折ラウアさんと町に出て思ったことのひとつだ。

うーん。変えてみようかな・・・。
今の私なら出来る！
無期限で！（笑）
と言うことで試してみた
できた。
すんばらしいぜ。この力！
ありがとう神様。私はいまとても自己満足に浸っています！
今の私は

白髪で
アメジストのような紫色に見えたり角度によって赤っぽく色が変わる宝石のような瞳！
コレこそ私が望んだ髪！
いやさ。さすがに黄色い目はねー
いや、あれなんだよ。暗闇で光ってびびったんだ

コレこそ究極！

あー。ついに私が変態であることに気がついた。

いやさ。向こうでも変態だったんだ。
ロリとかショタとか見てかわいいっていって浸ってた（笑）
かわいいじゃない。なんかこう・・・純粋でさ
いやたまに腹黒いのもいたけどさ
ギャップ萌え？
かわいいんだよそこがっ！

んんっ・・・コホン。
ごめんなさい。行き過ぎました。
とにかく変えてみたかったんだからいいじゃない！

といって澪禍は魔方陣を出したのだった。

澪禍の入学式～Ｐａｒｔ１～

試験には受かった。
ただ、私が驚いたのは――――――――――
「どこだよここ・・・。」
受かって、なんか試験官さんが超絶にっこりしてて、えーっとそれから・・・・
周りを見るとなんだか同じくらいの年の人々がいる。
そしてニコニコしている。
「受かったよー。」
「そんなのここにいてるんだから当たり前じゃない！」
「そんな風に言わなくてもいいでしょー」
みたいなどこにでもあるような会話が聞こえる。
ようするに、受かった人たちはそのまま学園へいくみたいだ。
でもみんな同じ服・・・。あぁ制服・・・。
制服ッ！？
私持ってないよっ？
自分を見ると着てました。
どうやって着替えた・・・？

あぁ。魔術かー

やっぱり5年間いてても前の世界のことを考えてしまう。
魔術なんてなくて科学が発達していたあの世界。
この世界はあの世界よりも文明が発達してはいないけど、それでも
この世界はあの世界よりもいろいろと便利なのだからなぜかとても
矛盾しているようにしか思えなくもないのだから

「あのぉ・・・・。すいません。」
「ん？なに？」
「はぅう。えっと・・・・。」

「お友達になってくれませんか？」

はい？

私の目の前に本当に美少女！っていう感じの女の子がたっている。

「えっと・・・・・・。」
「あぁ。自己紹介をしてませんでしたね。わたしは、シャルロッテ・
マリアーノ・ハルベティアです。シャルとおよびください。」

んんんんん？
いま国名が入っていた気がする
気のせいか？

「私は香乃澪禍。えっとレイカでいいよ？」
「珍しい姓ですね。レイカが名ですか」
「一つ聞いてもいいかな？もしかしてシャルって王家の人かな？」
「そうですね。私は今の国王の四番目の娘になります。」

！！！！！！！！
あの四姫様か！！！！
うわぁ・・・。こんなところで出会えるなんてー。これって運命ですか？

「そうなんだー。」
「レイカさんは私に対してなにも感じないのですか？」
「んん？私はたとえ王家の人であってもこの学校の生徒であるなら差別なんてしないよー。仲のよさでの優先順位はできてもね。私はただの傍観者になりたいんだ！」
「そうなんですか」

ニコッとシャルが笑みを浮かべる。
可愛いなぁー。お持ち帰りしてーよ。うん。王家だから絶対出来ないだろうけど。

「レイカさんとはいいお友達になれそうです！」
といって去っていった。

「不思議な感じの子だなぁ・・・。」
そう思っているとＬＨＲが始まった。

「私はこの魔術特化型特待生クラス――――長いからＳクラスの担任のシュリア・レイバティンだ。この一年間お前たちのこと預かる者だ。まぁ。よろしくな。」
「わたしは、このクラスの副担任のメイ・ナーバリンですぅ。よろしくねぇー」

副担任大丈夫か

「入学式は今日の１０時から始まる。ちゃんと用意しておくように。お前たちの荷物はすべて寮に届けてあるから安心しろ」
「ということでＬＨＲ　は終わりですぅ」

入学式は１０時・・・。って夜かよ！！！
夜の入学式ねぇ・・・。まぁ校長の話がいつもより眠くなるだけだから気にしない気にしない。それよりも神様が言ってたあと２人の異世界人探さないとなぁ・・・・。
まぁのんびり探そう・・・。

寮はでかかった！
１人部屋最高だぜ！！！！広いし！！！
でも残念なことに私は家具の一つすら持ってないから買いにかねばならない。
「で、入学式の準備って何するんだろう・・・。」

つぶやいた瞬間

「澪禍ーーーーーーーっ！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！」

ドアが行きよいよく蹴破られた。

澪禍の入学式～Ｐａｒｔ２～

「澪禍ーっ！！！！！！！！！！！！！」

ドアが蹴破られたところを見ると一人の少女が立っていた。

「えっ・・・・・・。えーとどちらさまですか？」

「会いたかったぞ。いとしの友よーっ！！！！！」

だから誰なんだ・・。私はお前に見覚えがないぞ・・・。

ていうかどこのジャイアンだよ・・・・

「なんだ？私のことを忘れたのか！この薄情者めーっ！！！！！」

「だから誰なんだ・・・・。」

「一度しか言わないからよく聞くんだぞ。私は元明帝中学２年３組橘春乃だ。」

ああぁ？名前に漢字が・・・・。もしかしてのもしかして・・・・。

「お前はあれか。あれなのか。馬鹿の春乃なのか」

「馬鹿いうな。まぁそうだぞ！！！。澪禍と同じでどこぞの神様に飛ばされたんだ」

「へー。ふーん。なーるほど。」

「なにその態度！！！感動的な再開だぞ？お前はそれを無駄にするのかーっ！！！」

「落ち着け馬鹿」

「馬鹿じゃないもん！」

「（＊／＿＊）　ダカラドーシタ」

「　ガ――（ °Д °；）――ン！！！！！　」

春乃は崩れ落ちた

「ていうかどうしてわかった。私は今はもうあの頃の姿とはちがうんだぞ」

「決まってるじゃないか。名前だ」

「そーなのか」

「そーなのだ」

「ていうか春乃も違うな」

「私は転生者だからな。」

「転生したのか」

「そうなのだ」

「澪禍も転生したんだろ？」

「いや違うな・・。私は単純に玄関を開けたら飛ばされた」

「なにそれひどい。私は上から鉄筋コンクリートが降ってきて死んだんだぞ？」

「それはまたご愁傷さま」

「どうも・・・・。」

「で、私はあっちではどうなってた？」

「澪禍はあっちでは爆破テロに巻き込まれて死んだことになってた」

「なにその嘘っぱち」

「まぁそれで跡形もなく死んだのならってみんな死体がないことに納得してた」

「なにそれひどい・・・・。」

「それで本題だ。澪禍。私をここに住ませろ。」

え・・・？

「はぁ？なに言ってるんですか？」

「だからここに住ませろって言った」
「春乃にも寮の部屋あるじゃん」
「ないよ。私は特待生じゃないからね。一般生は部屋を借りなきゃいけないんだけど私が借りようとした頃には既に満室だった。」
「それまた残念だね。って全員分ないんかい」
「ないよ。私のほかにも部屋を探している人はたくさんいる。そういう人たちは貴族たちの一時的に下僕となって貴族たちの持ち家に住まわせてもらうんだ」
「えー・・・。なにそれ下僕ってひどいな。というよりなんで一般生？」
「魔力の量と一般試験があって、魔力の量が多い者は特待生で一般試験なしで、特に多くない者は一般試験。それで私は一般試験で受かったからここにいる」
「一般試験で特待生にはなれないのか？」
「特待生には魔術特化型と普通の特待生があって、魔力特化型は魔力の量が多い者が、普通の方は一般試験の上位または魔力の量が微妙に多いものがいくんだ」
「で、春乃は一般試験の成績と魔力保持量が普通だったんだ」
「そうなんだ。神様って酷いと思う。どうしてここまで差別するのかな・・・。どうして澪禍には才能をめいいっぱい詰め込んでチート性能にしておいて私にはないんだ！」
「チート性能って・・・。」
「そうじゃまいか。魔力保持量一位だぞ？それのどこがチート性能じゃないんだ！！！」
「一位？」
「そうだ。一位だ。二位のものと大きく差をつけての一位だ。そうでなきゃこんなに部屋がでかいわけないじゃないか」
「そうなんだ。」
「一番酷いと思うことは魔力特化型特待生の制服はみんなと違うことだ。魔力特化型特待生の制服には冬や夏にとっても便利な全自動

適温魔力加工がついてるし、それになんといっても制服が可愛い」
「お前の恨みは制服の可愛さか」
「そうだ」
「まぁいいや。住んでもいいよ。無駄に部屋数があって困ってたし。」
「ありがとー。このご恩は一生忘れません」
「どうも。」
「んじゃ荷物を置くよー〈汝、彼の空間より今ここに移動せよ〉」
「なにその詠唱・・・。」
「〈テレポーティング！！！〉」

（ダサい・・・）

どっさり・・・。っと荷物が現われた

「疲れた・・・。」
「あらそう。」

「で、入学式の準備って何するの？」
「単純な話。舞踏会です」
「なにそれめんどくさい。行かなくてもいいいですか？」
「澪禍はたぶん新入生代表になるから無理だと思うよ」
「ダルッ・・・・・・・。」
「まぁいいんじゃない？」
「それよりも私ドレスもってねーよ」
「別にいいと思うけど。まぁ目立つけど。」
「目立つのいや」
「無理。あんたのその容姿からして目立つ。なにその美少女。十人

中十人が認める美少女だよ・・・。」
「そんなステータスいらん」
「いいんじゃないの？買いに行けばいいじゃない」
「そーですねー。ってことで買いに行こう」
「私も行くー」
「でどこに買いに行くんだって感じだわ」
「この学園のすぐ近くに王都があるからそこに行けばいいんじゃないかな・・・」
「なにで」
「澪禍の魔法で」
「だる・・・。まぁいいや」
（テレポート）
「はい王都ーっ！！！！！」
「はやっ！ていうか無詠唱！！！？」
「さぁいこいこー」

王都で買ったものー
・衣服
・家具
・魔道具
などなど

「あんた金持ちなのね・・・。」
「そうなの？」
「普通私たち学生の小遣いは金貨一枚から銀貨５０まいよ・・・」
「へー。」
「まぁいいや。んじゃ着替えて行くとしますか。」

「そーですね」

そういって私たち2人は入学式の開場へ向かったのだった

澪禍の入学式～ｐａｒｔ３～（前書き）

しばらく更新できないです
学生ってつらいね！
何でテストなんてあるんだろ

澪禍の入学式～Ｐａｒｔ３～

入学式開場

「でさ、春乃。あんたいつまで私の隣にいるんだ。クラス違うんだからそっちに行けば？もうすぐ始まるぞ？」
「酷いやつだな。決まってるじゃないか。澪禍はただでさえ可愛いんだ。澪禍の処・・・いや貞操を守るためにいるのだ」
「いや。私あんたより強いし」
「澪禍は押しに弱い。だから押し倒されてアウトさ」
「だからなんで貞操・・・。もっと別のことあるだろうに」
「いんや。男なんて絶対に獣だ。獣に違いないんだ！！！！！」
「なんでそんなに燃えてるわけ・・・？」
「ふん。澪禍は知らないんだ！私が村でどんな目にあったのかを！！！！」
「五月蝿い。黙れ。燃えるな。暑苦しい」
「知るか。男どもは獣男どもは獣男どもはけ――――――」
「五月蝿いわ。黙れ。いい加減に死ね。まじで逝ってこい」
「言葉が悪いな澪禍。顔にあってない」
「知るか。神にいえ」
「神様ーっ！！！澪禍の口が顔に似合わず悪いですーーーーーー」
「文章おかしくないか・・・・・？」
「大丈夫だ。問題ない。」
「問題はおまえだ」

『ただいまより。第８０回ハルヴィーン学園入学式を行います。生徒は直ちに自分の席に着いてください』

「ほら。アナウンスが流れたぞ。今すぐ消えろ」
「酷いなっ！！！！」
「今さらだ」

そういって私は春乃を追い返すと自分の席に着いた。
周りを見るとやっぱりお金持ち貴族がおおいんだなーとか思うていうか・・・。視線が痛い。いやもういっそ気のせいにしておくことにする

『次は校長先生のお話です』
あれか・・・・。
あの定番の、校長の話は長くて眠いってやつか。
春乃のほうを見ると春乃は
「Ｚｚｚ・・・・。ぐぅ」
ねてるーーーーっ！校長の話始まってから一分もたってねーよ・・・。
まぁいいや。

『舞踏のお時間です。みなさんパートナーを決めて踊りましょう。そのパートナーは生涯、かけがえのない存在となることでしょう。男女問わず相性のいいパートナーを見つけてくださいね』

なんか無駄にロマンチックだな・・・。
生涯にわたるかけがえのない人ねぇ・・・。

絶対に男はいやだ。めんどくさそう。何よりだるい

「レイカさん！僕とパ「いやっ！レイカさんとなるのはおれ「いやいや、俺のほうが相応しい」

うぜぇ・・・・。
「春乃ーっ！！！」
「澪禍！組もうぜ！！！！！」
「そうしよう」

男達は撃沈した

「いやさ。他の変な人たちと組むよりも春乃と組む方がよっぽど安全だわ」
「確かに（笑）」
「「いやおまえ誰よ？」」
「ぼくかい？僕はたんなる通行人Ａさ」
「いや、通行人はしゃべらない」
「しょべるよ？人だし」
「あっそ」
「消えろ」
「怖いこというね～。まっ所詮通行人だし消えるけど」

「なんだったのあいつ・・・・。」
「私に聞くな」
するとなんだか向こう（どっちよ）が騒がしくなってきた
「なんだ？」
「いってみよーぜー」
「そうしようか春乃」

いってみると、そこには――――――
「勇者様。どうか私と」
「いえいえ。私とぜひ」
「・・・・・・・・・・・・。」↑勇者様
「ちょっと。困ってるじゃん」
「貴様らには関係ない。庶民は黙ってろ」
「五月蝿い。馬鹿が。クズがなにいっとる」
「春乃黙れ。お前のが馬鹿だ。」
「おまえは・・・・・・。」
「ぁっ。ぁの・・・・・・。」↑勇者
「なに？」
「えっ・・・・・。えっと・・・・・。私と組んでいただけませんか・・・？」
「なんで？」
「えっと・・・・・。男の人たちが怖いから・・・・・。それにあなたはとても強そうです。どうか私と組んでいただけませんか？」
「先約がいるんだけど・・・・」
「えっと・・・・。別に相手は1人と定められているわけではありませんよ？多すぎてはいけない・・・というだけで2．3人はいけます。なので、どうかお願いします。」
「名前は？」
おい春乃・・・・。

「えっと。ユメノです。日向夢乃です。」
「「！！！！！！！」」
私たちはなんとしても入れなければならないと決意した
「いいよ。組んでも。」
「ほんとですか？」
「だからいいっていってるじゃん」
「そうだよ！澪禍がいいってっいてるんだからいいんだよ」
「ありがとうございます」
また再び男達は撃沈した

～寮に帰る道で～

「夢乃。単刀直入に聞くけど。なんで勇者？」
「えっと・・・。異界の力が強大なものが現われたからそれを倒してこの世界を安定させるためって・・・。召喚したひとにいわれました。なんで異界の者を倒すのに私なんでしょうか・・・。私には力なんて全くないのに・・・。」
「ふぅん。じゃ夢乃は異世界人なんだ」
「そういうことになりますね。ここはかなりファンタジーな世界のようですし。そういえばあなたたちは私のいた世界の人達となにかにています・・・。」
そういうと夢乃はすこし悲しそうな顔をした
「かえりたいの？」
「えぇ・・・。お母さんたちのことが心配です・・・。」
「いい子だねぇ・・・。」

「どこのばぁさんだ」
「そういえばですが、レイカさんやハルノさん姓って私聞いてませんね・・・。おしえてくれませんか？」
そうきたか・・・。
「私は橘春乃！」
「えぇぇぇぇっ！！！！！！」
「ちょっあぶなっ」
危うく失神しかけた夢乃を支えると、
「えぇぇぇぇ？あの春乃さんですか・・・？」
「そう！あの春乃！もともと夢乃のいた世界の住人だよ！」
「えぇぇぇぇ？でっでも、春乃さんはたしか・・・。」
「うん。あの世界で私は死んだね」
「ですよね。でもなぜ記憶があるんですか？普通輪廻転生の輪に従えば記憶ってなくなりますよね？」
「そうだね。でも私は神様がまちがって殺しちゃったからね」
「そうなんですか・・・。で、レイカさんは？」
「ん？私？私は香乃澪禍。もともとそっちの世界の住人だね。私が知っている限り異世界人は今のところこの３人だけだから、まぁもう異世界人で驚くことはないでしょ」
「「へぇ」」
「なんで澪禍さんはそんなこと知ってるんですか？」
「ん？神様からのお手紙。空から降ってきた」
「空から・・・・」
「そう空から。読み終わったら三秒後爆発する仕組みの手紙」
「いやな手紙ですね」
「だね」
「あっ。このあたりに私の住んでいる屋敷がありますので私はこの辺で失礼しますね。じゃぁまた明日」

「ばいばーい」
「じゃねー」

「おおぉ！！！！」
「なんだ。五月蝿い。電波でも受信したのか？」
「いや違うから。いやぁ。よく考えたら私たちのグループって異世界人だけだなーとか思ってさ。」
「そだねぇ」
「なにその軽い感じ。もっと驚くべき。そうすべき」
「あっそう。もうすぐだから静かにしとけ。近所迷惑だ」
「すまそ」

そういって私たちは寮に帰ったのだった

初めてのテスト（笑）（前書き）

タイトル変えましたー
テストも終わってこっちは幸せ！
こうやってパソコンをいじれるだけで幸せですね

初めてのテスト（笑）

そのとき、澪禍は苦しんでいた

ハルヴィーン学園初等部一学期中間テスト
～魔法特化型特待生専用～

総合

問1．○△■　これの読み仮名を書きなさい

知るかそんなもん。わかるわけないじゃん。思いっきり記号だろ。
何？そのままかけばいいの？

問2．この学園の8代目の校長は？

いや今の校長じゃん。いちいち8代目にする必要あんの？

問3．担任の先生は好きですか？

いやもうそれは問題じゃない

「なんだったんだあのテスト・・・。」
「そうですね・・・。澪禍さんの言うことは御尤もです」
「夢乃は理解してくれるか・・・。」
「何だ。私が理解できてないとでも言うのか・・・」
「まずひとつ。春乃には喋ってない」
「なにそれ酷い」
「すまない。それが常識なんだ」
「うそだーっ!!!!」

みたいなかんじで、私たちは疲れていた。
(春乃は例外である)

「そろそろ部活決めないとなー」
「だなー。勧誘日が来る前に決めとかないとな・・・。」
「私たちの精神疲労がただじゃすまなくなります」
「「だねー」」

と、私たちにはこういった悩みもあった

「なぁ澪禍。もういっそのこと平等で澪禍はどこの活にも入らないってことにすれば?」
「いやーさ。文芸部に入ればさ。この学園にある貸し出し禁止の本が読めるというううわさを聞いてさー。もしそれがほんとだったら、文芸部にでも入ろうかなーとか思ったりしたリー」
「澪禍さん・・・。それ以前の問題で、たぶん私と澪禍さんは生徒会からお呼ばれがく「よくぞいってくれた!!!!!」
「言葉さえぎられました・・・・」
しゅんとなる夢乃。それに対して何だか変態チックな匂いがしそう

な人
「私は現生徒会長ユルリア・ランスタンズ・フォードだ。好きなように読んでくれてかまわない」
生徒会長・・・。
こんな人で大丈夫か
「大丈夫だ。問題ない」
「勝手に人の心読まないでください」
「ということで、部活側の勧誘の前に私たち生徒会から先に勧誘をしにきた」
威厳があるのかないのか全くよくわからねぇ・・・
「心配せずとも私は威厳たっぷりだ」
勝手に心を読まないでください
居心地悪いです
「それはすまない。読心はやめよう」
「それはあなたの趣味の悪さがよくあらわれている行為ですね」
夢乃ちゃーん。言葉が・・・・言葉がー
「澪禍・・・。夢乃が毒舌なのは今に始まったことじゃないよ・・・」
「そうか春乃。それはすまなんだ」
「ちょっと傷ついたが・・・・。レイカとユメノよ。私たち生徒会に君たちを招待したい。勿論ただというわけではない。この学園の機密図書の貸し出しや立ち入り禁止区域への出入りもかまわない。

どうだ？」
「とても悩みますね。お時間をいただけたらうれしいのですけれど・・・」
ナイスだ夢乃！君はとてもすばらしい！！！！
「わかった。明後日。また私が君たちのもとを訪れることにしよう」
「ありがとうございます」
変わった生徒会長だった・・・・

生徒会・・・って絶対これ生徒会長が印象悪くしてる気がする

私たちは生徒会室にいた
春乃はいないが

「じゃあ、2人は生徒会に入ってくれるんだね」
目が輝いている。なんかこの人犬みたいな気が・・・・・
「いえ、入るのは澪禍さんだけです」
「そうかいそうかい。1人でも入ってくれるなんて私はとってもうれしいぞ」
・・・。なんかこの人、幼馴染意外に友達いなさそう。。。。
「君今とっても失礼なこと考えたね？私は君に言われて読心をやめているのだが・・・・」
「やめてください。心を除かれるのは不愉快至極極まりないです」
「そうかー。じゃあ嫌われないためにも私は『君の』心を読むのをやめることにするよ」
「他の人にもしたほうがいいと思うんですけどー」
「はっはっは。やったよー。生徒会役員が増えて私はとっても幸せだよー」
まるで聞いてない・・・・・。
「じゃあレイカちゃん。君を生徒副会長に任命するよー」
「・・・・。はい？」
え・・・・？副会長？
「副会長がいなくて私はとっても困っていたのだー」

そういうことか・・・・

「君なら成績優秀だし他の生徒も問題なく納得してくれるだろう。

がんばってくれたまえ」
「で、私何するんですか？」
「単純だ。仕事はすべて私がするから君はその肩書きを身に着けているだけでいい。あ、イベントごとは別だがな」
「そうですかー」
「そうなのだ」
「では失礼しますー」

「変な生徒会長でしたね澪禍さん」
「そうだな・・・。夢乃・・・」
「今気付いたんですけどこの話。男少ないですね」
「なに言ってるんだ夢乃？」
「いえ。なんでもありません」
見たいなかんじに夢乃が少しばかり意味不明なことを言っているが私は気にしないことにする。
「イベントごとって何のことなんだろーな」
「あれじゃないですか？学年対抗戦とか」
「なにそれ」
「澪禍さん知らないんですか？学年で成績優秀者が何人か選ばれてトーナメント方式で競っていくっていうものです。成績優秀者はクラスごとに選ばれるんです。もちろん私たち特待生と一般生は別で一般生は優勝者のみが特待生枠で戦うことが出来るんです」
「へぇー。なんかめんどくさそう」
「人事みたいに言わないでください。澪禍さんあなたも出るんですよ。おそらくですけど」
「うげ・・・」
「まったく・・・。すこしは自覚してください」

「いやです！！！！！」
「お願いですから・・・」
「そういえばさ。夢乃って勇者だったよねー」
「そうですね。」
「予言について詳しく教えてくれ」
「予言についてですか？」
「そうだ」
「えっとですね
『異界より強大な力を持つもの現われこの世界を滅ぼす
　止める為には異界から召喚したものを勇者とし、その破壊を止めよ』だった気がします」
「気がしますって・・・。そっかー。あの神様がくれた手紙のとうりなら私たち三人のなかの１人がその異界の者に当てはまるのか・・・。」
「単純に考えたら澪禍さんですよね」
「だぬ」
「でも、澪禍さんは神により直々に召喚された者。ということは春乃さんですか・・・。」
「まだわからないね。なんともいえない。全くどうしたものやら」
「そうですね・・・。」

このとき推測は的を射ていたことに私たちはまだ気付かなかった
これにより私は大きな失敗を犯す

「そっかぁ・・・。私はこの世界を滅ぼさなきゃいけないんだ」

そういった少女は屋上で卑劣な笑みを浮かべる
「夢乃・・・。私はあなたを殺してこの世界を滅ぼすわ。そうすれば私は神になれるんだもの。私の悲願のためにも、しっかりと殺されて頂戴？」

その少女は澪禍と夢乃の大事な友人
果たして、夢乃はこの者を倒し世界を救うことが出来るのか
それはとても卑劣で哀しく極悪な神による物語
澪禍は果たしてどうするか
それがおそらくこの物語の鍵となるのは間違いのないことである

～次回予告～

澪禍と夢乃は予知の力を持つものに出会う
それによって知らされる真実
それは予測していたことのはずなのに
おおよそわかっていたはずなのに。
この世界の終焉の鐘がいま、鳴り響く
それはそれは哀しい物語りが始まる合図
終わりへのカウントダウンが今始まる
次回、第１６話「終焉へのカウントダウン」

「ごめんね、夢乃。私はあなたを殺さなければいけない」

生徒会・・・って絶対これ生徒会長が印象悪くしてる気がする（後書き）

これから気が向いたら次回予告でも入れようかなとか思ってたり思ってなかったりします
おそらく血みどろみたいな話がこれからあるんだろーなーとか思うはっきり言ってぐろくなりそう
まぁ、
作者の気まぐれです
暇なのでツイッターでも始めることにしました（笑）
ｈｔｔｐ：／／ｔｗｉｔｔｅｒ．ｃｏｍ／#！／ｓａｋｉ＿ｍｉｈａｔｅｉ
見果てゐとは叶わぬ夢などとかいういみがあったとおもう

終焉へのカウントダウン　～夜明け～

朝

澪禍と夢乃は1人の少女と出会った
その少女は自らを予言の巫女といった
巫女曰く、
『異界の者が覚醒し、世界を滅ぼす』
というありがたくないお告げを貰う
「私はあなたたちのことを見ていることしか出来ないけれど、がんばって。」
という応援もいただいたが夢乃はまだ心配のようだった。

授業中に異変が起こった
空に浮かぶ太陽が漆黒なる黒へと色を変えたのである
生徒たちは混乱し、騒ぎを大きくさせた。
そんななかでも生徒会長は生徒会長らしく仕事をしていたのだそうだ

私たちは屋上にいた
「どうしたの？澪禍、夢乃？」
屋上には春乃がいた

ただ違うのは、春乃の目と髪の色であった
その色は異世界人を表す色
髪の色は漆黒の黒さを持ち、眼は燃えるように紅い。
それを見て、私と夢乃は驚いた。
「春乃さん・・・。その髪は一体どうなされたのです？眼の色もそう。昨日まで見てきた春乃さんとはまるで別人ですよ？」

「わたしね。覚醒したの」

その言葉が放たれて私たちの間に沈黙が訪れた。
「覚醒・・・・・・？」
夢乃は混乱し、動揺を隠せない。
それに対して私は一言もしゃべらず黙ったまま無表情であった。
「澪禍さん・・・。私たちは――――――」
「夢乃？動揺を隠せないのはよくわかる。でもね？いつかは来ることだってわかってたじゃない。私と春乃。そのどちらかがこの世界を滅ぼすものだってわかってたじゃない。」
その言葉と共に春乃は極悪の笑みをうかべ
「そうだよ？夢乃。いまさら動揺したって何の意味もないじゃない。いつかは来ること
ＲＰＧ風にいえば私は魔王で夢乃は勇者
それはそれは簡単なこと。そうでしょ？ただ澪禍は部外者。偶然なのかそれとも運命（さだめ）ともいえる必然なのか
ただこの場に居合わせてる私たちと同じ異世界人というだけ。あんまりかかわらないで欲しい・・・。というのが私の本音だね」
「それはいまさらのこと。」
私はそうつぶやいた

「いまさら言っても始まらない。1人役があまるだけ」
「ふふふっ。そうだね。一人の役が余るだけ。」
「でも。やっぱり私はこの世界を守るためにも戦わなくちゃ」
夢乃は言うと
「私はただ私の悲願の為に戦うのみ。ごめんね？夢乃。だから私はあなたを殺さなくちゃいけない」

春乃はそういうと、私たちの目の前から消えた
おそらく瘴気による転移（テレポート）
ただ、春乃はこの世界を滅ぼすのに時間がかかる
そう考えると私は時間に少しゆとりが出来たと思った

夜

いつもなら寝ている時間だが澪禍は起きていた。
それは本来神界へと帰ったはずのラウアさんが今、目の前で立って

いるからである。
「えっと・・・。何か御用ですか？」
「おぬしに言わねばならないことがある。」
嫌な予感はしていた
まさかそれが的中するとは思ってはいなかっただけであって実際に予感はしていた

「先ほど、神界の協議会で決まったのだが、澪禍。今回おまえはこの事件においてどちらのかの味方につくことを禁じる。」
「え・・・？」
「決まったものは仕方がないのだ。本当のことを言えばわたしは勇者の味方になって共に世界を救ってくれることを望んでいた。」
「だったら・・・。」
「だが、神界はこの世界を見捨てることにしたのだ。強い光を手にするには必然、強い闇も必要だ。この世界を見捨てればそれに値するだけの闇が生まれ、神々たちはさらなる力を得ることができ、より多くの世界を救うことが出来る。澪禍。これは仕方のないことなのだ。私も生まれ育ったこの世界を見捨てるなんてことはしたくはなかった。」
「じゃあ少しは対抗すればよかったじゃないですか！！！」
「価値というもので考えろ。ひとつの世界と八百万の世界。どちらのほうが価値が高いと思っておる。ひとつの世界の犠牲で、他の世界が救えるのなら、必然神はひとつの世界を犠牲にすることを選ぶに決まっておろうがっ！」
ラウアさんの目には大粒の涙を浮かべていた。
「私だって見捨てたくなかった！生まれ育った世界で神としての役目を終えて死ぬつもりだった！だがな、いくら神獣とはいえ神のなかでは下等の部類だ。偉大なる大神には勝てない。」
「だったらどうしたって言うのよ。私は夢乃側についてこの世界を

守って見せるもの！」
「それが大神と戦うことになったとしても？」
「ええ。私を召喚したのがいったいどこの誰かはしいらないけれど、私には神にも対抗できる神子なる力があるもの。」
「その力を過信しすぎるな。偉大なる大神ならばそれくらい赤子同然で捻り潰すことが出来よう。」
「ラウア。もうそこまでいいんじゃないかな。」
ラウアさんの後ろにいきなり現れたものはそういった
「はじめまして。私が神界の大神の１人。あなたをこの世界に召喚したもの。ユードリアよ」

終焉へのカウントダウン　～夜明け～（後書き）

あついー

作者は熱中症になりそうでたまらない

終焉の終幕（前書き）

この小説の名前の通りこの小説は・・・っと続きはあとがきで

終焉の終幕

「はじめまして。私が神界の大神の1人。あなたをこの世界に召喚したもの。ユードリアよ」
そういって、ラウアさんのうしろに突如人があらわれた
ラウアさんの顔に焦りの色が見える
「ラウア。私は貴女に言ったはずなんだけどな。説得しても無駄。説得するぐらいで収まるような子じゃないって。私の遊びで巻き込んだ子。私が力を与えた子。でもね？それ以上に。いえ、元々、この子はそういう力が素質としてあって、私が与えた力がおまけのような物だったの」
「でも・・・。」
「知らないわ。貴女の都合なんて知らない。だから私はこういう風に彼女を止めることにしたのよ」
すると、澪禍のまわりに大きな魔法陣が表れ
「そうね。このまま貴女を神界へと連れてっても、貴女は逃げちゃいそうだからね。厳重に鎖で繋いでおかないと」
澪禍の周りの魔法陣は増え
「暫く封印しておくことにしましょうか」
「！！！！」
封印されるのは御免である
どうにかして此処から立ち去らないとーーーーーー」
「逃がすわけないでしょう？」
「！！！！」
身体を鎖で固定される
「そうね。折角だし。神界じゃなく、異世界へ飛ばしちゃいましょう（笑）」
！！！！！！！！！！
（笑）で済むような言葉じゃない

本当にヤバイ
封印が解ける頃には人じゃなくなる気がする。いや絶対人じゃなくなる
「面白そうだから、貴女の元々いた世界に封印するのもいいわね」
それならいいかも、と思う自分と
いや、ダメだろっと思う自分がいる
どちらにせよ。もう手遅れだ
いくらチートとはいえ神に勝とうなんて、ましてや大神に勝とうなんて
できるはずがないじゃないか
意識が薄れて行く
そっかぁ。封印されるってこんなかんじなんだぁ・・・・・
そう思うと私は最後の意識を手離した
「せっかくだわ。見ていきなさい。この世界が消えて行くその様を。親友が消えて行くその様を」
もちろんその声は澪禍には届かない

終焉の終幕（後書き）

この小説は観察記となるんですけど
それは実はまだまだ先でですね
ネタバレですが主人公は神様になったりしたりしたりして
まぁとにかくいろいろあったりしたりします（笑）
生憎私は文才に恵まれてないため何かと大変だったり
と、まぁいいやで終わらせたりしてみたりして（笑）

新たなる世界（前書き）

誠に勝手ながら
また再び小説家になろうで連載をさせていただきます。

再び連載を始める理由は、

1．ブログで連載しようとして、扱いきれなかった

2．やっぱりここが一番楽だった

ということです

また再びお目汚しをしてもらうことに感謝をしながら連載をさせていただきます

ついでに、作者はいま絶賛スランプ中ですぐだぐだですが、気にしないでください

新たなる世界

目が覚めると、まわりに変な人たちがいた。
いや正確には、獣の皮一枚しか着ていない人たちがいた。
なにか喋っている？
まぁいいやと動こうとすると、
「まて」となんだか上から目線で言われた。
なんだかムカつく。燃やして灰にしたい。他の人々は皮一枚なのに
こいつだけちゃんと服着てやがる
くたばれこっちは寝起きで機嫌が悪いんだよ
「なにかよからぬことを考えておるな？この小娘が」
と罵られた
「黙れ。うすらハゲ。燃やすぞ」
剥げていたので反撃してみた
すると
「ふむ。それだけの頭はあるようだな」
と考えるしぐさをする。
なにか絶対嫌なこと考えてるなこのハゲが

「妖の類か？」
「だれが妖怪だ。ハゲが。」
　なんだか自分でも考えられないような暴言をはいているような気
がするような・・・
気にしないことにしよう

“しかし、この娘・・・
我の巫女にすれば・・・・・？

どことなく、聞こえたその言葉に、澪禍は寒気を覚えた。

逃げないといけない

その声は澪禍にそう思わせるに値するほど、嫌な予感しかしない。

［転移魔法展開］

頭に聞き覚えのある音が聞こえる
魔術の音だ。
型式が違うが、きっとあの神に異世界にでも飛ばされた影響だ

［展開完了］

「さらばだっ。逃げるぜ！」

私はそういうと逃げた

私は今、飛ばされたときの記憶を探っていた

思い出せない。肝心なところが、一番大事なところが思い出せない。どうしてなのか、まぁ大体予測できるが思い出せないのでイライラする。

［攻撃魔法展開］

頭に音が流れる

いやまて、これじゃあ八つ当たりじゃね？

でもイライラするしな。

ま、いっか（笑）

［展開完了　～業火～］

「罪人よ、消えてなくなれーい」

辺り一帯の森林が灰と化しました

後にこの山火事は、神々の怒りと呼ばれたそうな

「腹減った。」

くそう。森を灰にしたのが間違いだったぜ。果物のくの字すらない

よし、村を探そう

「村、村、村ねぇ。」

村らしきものは見える

だがっ。だがしかしだ。
何故に竪穴！？
あのおっさんたちの服もそうだ。
まさかまさかの縄文あたりとかいうオチなら私は泣きます

まだ米ねーじゃん
終わったな！私はもう終わったな
米を求めて三千里・・・
そんなに歩いてないけどさ

私が転移してから、一番最初に食べたいと思ったのは、米でした

米が食べたいなら海をわたらなければならない！
面倒なので却下
というよりも、もし
もしこの世界が私が１４年間住んでいた世界なら・・・・・

歴史変えられるんじゃね？

という疑問が頭に浮かんだ

咎人と傍観者（前書き）

会話文無し・・・・
ははは
ノリで書くもんじゃねぇ・・・・

咎人と傍観者

人の記憶というものは脆く、そして、崩れやすい。
頭を打っただけでも消えるのだ
当然、時代が過ぎれば忘れ、モノの存在さえも、消えてしまう。

それは、時に、神々にさえも、飲まれてしまう。
俗に言う、歴史の闇
人は過去には戻れない
なので、過去を知るのに文献を見たり、地層を見たり、とにかく自分の目でみて確認することはできない
文献にも著者達の誇張がはいる
信じるべきでないことも、当然あるのだ。

澪禍は、あのあと集落を見つけ、妖怪を見つけ、幻想を見た
澪禍は魔と名のつくものを司ることが、できるようになった。
その間に、澪禍は自分が全く老いていないことに気づく
一部の人々には邪とされ、迫害され、集落を追い出されるが、大半の人々は澪禍が作る薬などで、感謝していた。

そのうちに、集落で流行り病が現れた。
集落の人間の半分が亡くなった。

その中には、澪禍にとても親切にしてくれる人々もたくさんいた。

残った人々は、澪禍のもとを訪れ、薬を要求した。

その人々は、かつて澪禍を蔑み、妬み、そして迫害したものたちだった。

死者の名を澪禍は聞き、澪禍は落胆した。死者の中での大半の人々は澪禍と親しかった人達だった。

澪禍はすぐに感ずいた

その死者の中には、澪禍を迫害したものたちは誰一人としていなかった

澪禍はこっそり転移して、生き残りの親しかった人達とあった。

みな、流行り病にかかっていた。

診断してみれば原因はすぐにわかった

毒だった

澪禍は怒り狂った

元々狂ってはいたが、それよりも狂っていた

診断して、澪禍が家にかえってすぐ、澪禍と親しかった人々は惨殺された。

それは澪禍を狂わせるのには充分だったのだ。
澪禍は魔をもって、集落を滅ぼした
魔で殺せなかった人は、刀で切り殺した
何時しか他の集落で澪禍はーーーーー

邪神と呼ばれるようになった。

澪禍は気にしなかった

別に邪神と呼ばれようがなんと呼ばれようが、自分は自分なのだから

誰もよってこなくなった

これを機に傍観者として、世界を見てみようかな。と思った

争いもあくまで中立を保つ。
あくまでではあったが。
人の世には関わらない

コレを一番として、澪禍は傍観者となった

邪神と呼ばれるようになって、神らしく能力に目覚めた

禍を司ること

そして、“かんしょう”を司ること

かんしょう。とは

干渉、鑑賞、観賞、勧奨、観照、環礁、緩衝、感傷、感賞、完勝、

癇性、管掌・・・・・

と、様々だ。

かんしょうについては、澪禍が気づいてなかっただけで、恐らくこの世界に来る前からあったのだろう

ただ澪禍が気づかなかっただけ

まぁ、とにかく澪禍の傍観者としての日常はそこから始まったのだ

咎人と傍観者（後書き）

春乃ふらぐがたちましたよー

神見習いと傍観者

一体私が何をしたのだと言うのでしょうか

はい、ここはまさしく・・・・・

出雲でした

邪神信仰、もとい蛇信仰は悲しいことに忘れ去られるのでしょうか

澪禍様の忠実なる蛇の日記より

私達（澪禍とペットたち数匹）は人がうるさいので旅をしていました

ついでに旅をしてるとなぜか

闇を司る能力を手に入れた

「蛇信仰かぁ。日本の信仰の最古だよなー。たしか蛇だと邪神みたいだから太陽の神と言うようにして信仰したんだっけ？」

考えもしなかったがとっても大変なことになっている気がする

「白と黒はどう思う？」

癒しのペット蛇さんに聞く

「どうもなにも私達の主は貴女です。我々は蛇神を束ねるモノ。全ての信仰は貴女にある。なぜなら、たとえ太陽の神と言われても、それは蛇神のことを指すからです」

「異論は御座いませぬわ」

「そう。」

日本最古かぁ

私は見てるだけが一番性にあってるからなぁ

！。そうだそうしよう

澪禍は何か思い付いた

春乃は今、神界にいた

「えっと、貴女は何の神になりたいですか？」

行っていきなりそれですか！

「んー。何でもいいけど、魔法を司る神様になりたいかも」

「すでにその神は居ます。正確には魔を司る能力を持つ邪神はすでに居ます」

「そっ・・・・そうなんだ。んじゃあ・・・って邪神・・・？」

「そうです。貴女は光属性の神にはなれません」

「え・・・・？」

「正確には貴女のなれる神は邪の神。即ち闇属性の神にしかなれません。もうひとつ言えば、貴女のすることなんてありませんあるとすれば・・・・そうですね・・・悪心でしょうか？」
「入らないよそんなの。んじゃあ災害を司る能力は？」
「すでに居ます。魔を司る能力を持つ神と同一で、正式には禍を司る能力です」
「もうその人最強じゃない・・・・・」
このとき春乃は知らないが、その人はまさしく澪禍の事である

「んじゃあ、暗器を統べる能力は？」
「有りませんな。じゃあそれでよろしいですか？」
もう何も残ってなさそうだからいいや
春乃はうなずいた

神の一通りの説明を受けた後、春乃は自分が神見習いとして何処の世界に降りたつか考えていた

「地球でよくね？」
春乃は地球に降り立った

神見習いと傍観者（後書き）

春乃あらわる　みたいな感じなお話でした
夢乃はわからないけど、確実に春乃は出したかったみたいな

神見習いと傍観神

澪禍は固まっていた

目の前には辺りを見回す少女
しかもどこかで見たことがあり、黒髪で緋色の瞳
色からしてなんだか嫌な予感がした。
それに蛇さんが猛烈に反応してる

「ちょっとそこの人！ここどこ・・・・・！★●☆▲▲◎◆□◎▼▽□■！！」
「意味不明な言語喋るな」
「え・・・っちょっと、え？何で？」
「何がだよ」
「えっと、神様をさがしてるんだけど知らないかな？（明らか目の前の人神様だよ。威圧感半端ねえもん）」
「一般人が知るわけないでしょ」
「んじゃあ、魔を司る神様知らないかな？（めっちゃあんた一般人には見えねぇよ）」
「知らないなぁ。お嬢ちゃん一人かい？」
「不審者だっ！！！」
「・・・・・・・・（ばれてないよな？）」

澪禍は基本姿を変えている。
と言っても、色だけだが。
今の澪禍はちょっと暗い茶髪に、同じ色の瞳にしてあった
ここら辺に住んでいる人々たちと似たような色である

「明らかあんたは一般人にはみえないし、何よりもその羽衣！それは神の証！ついでにばれてないとか思ったら大間違いだよ澪禍！」
「テンション高い。ウザイ。消えろ」
「久しぶりに会ったんだからいいじゃん。何？殺してほしいの？」
「あら怖いわねぇ。いったい誰に似たんだか」
「あなたに似ました」
「嘘だっ！！！」
「・・・・。」
「すいまそん」
「もういいです」

「春乃は何しに来たんだ」
「神様修行」
「なにそれ」
「はい？え。澪禍してないの？」
「うちは邪神に自然となったのさ」
「なるへろ」
「理解してる？」
「さっぱりさ」
「あ・・・そう」

「魔を司るねぇ」
「何か知ってるの？」
「・・・・・。」
「知ってるんだ・・・・」
「ノーコメントで」
「使いどころ違う！」
「あらそう」
「もういいわ。神様修行ってなに？資格みたいな証明いんの？」

「うん」
「はい、コレ」
だすのは闇の大精霊
「黒ちゃんこいつの修行完了っていってきて。神界に。」
「ご主人様。精霊は神界には入れません。入れるのは神だけです」
「そうなの？」
「そうだよ澪禍。そんなに面倒なの？わたしの修行って。」
「いやぁ私、別の世界に行くんだ。そこで神なのを隠して冒険者になるのさ」
「ふーん」
「仕方がないからついていってあげようじゃないか」
澪禍は考えた

あの糞大神に復讐だ

復讐と傍観者　1（前書き）

３ＤＳが取り上げられたため暫く更新できないです

復讐と傍観者　1

ユードリアは考える
あの子を、澪禍をあんな形で遠のけてよかったのだろうか
それのおかげで数々の闇の神々が死んだ。
あの子は、きっと私を恨むだろう。
少なくとも、あの勇者召喚で呼ばれたあの子は死んでしまった。
輪廻転生の輪に入ることは出来たが、きっと、きっとその子は来世で自分の能力で自らを滅ぼすだろう。あの力にあの子が耐えれたのは、あの子のあの性格があったからこそなのだ。
また。いつの日か澪禍にあう日が来たら、あの子に謝ろう。
私が悪かった。と

神界
それは大神を中心とする八百万の神々が暮らす世界
世界とはいっても、地球のような世界ではなく、さまざまな世界を見ることが出来る世界だ

「神の証を出せ」
神界に入るのには証がいる
「澪禍。通行証は羽衣だよ」
「あぁ。そうなの」
「いいだろう」
「どうもー」

「春乃さん。修行は終えたのですか？」
「はい！」
「師匠となる神は？」
「はーい。」
「・・・・・え？」
「どうかしましたかー？」
「えっと、香乃澪禍さんですよね？」
「その通り！」
「えぇと。ユードリア様がお呼びです」
「ユ、ユードリア様？」
「なに？春乃どうかしたか？」
「澪禍！ユードリア様って大神さまだよ！？なんでそんな大物と・・・。」
「ふーん。」
「春乃さん。澪禍さんも十分大物ですよ。なんてったって闇の大神ですからねぇ」
「はい？私そんなのになった覚えさらさらないんだけど」
「ご自身気付いてますか？あなた四つの能力の持ち主なんですよ！」
「だからなに？」
「澪禍。大神になるには能力が三つ必要なんだよ・・・」
「ふーん」
「無関心ですね。とにかくユードリア様のところへ澪禍様をご案内しろ！」

澪禍はユードリアと向き合い、互いに殺気を放ち、互いに武器をも

ちたたずんでいた
澪禍は巨大な鎌を持ち、
ユードリアは弓を持っていた

「はぁっ！」
澪禍が鎌を振るい
「ふっ」
とユードリアが弓を弾く
ユードリアの弓は幾千にも分かれ、澪禍を狙い、
澪禍は鎌から武器を変形させ、チャクラムへと変え、チャクラムを
投げ矢を弾き、残りの矢を闇を使って呑み込む

そんな争いが神界の中で繰り広げられていた

復讐と傍観者2

「たぁっ！」
澪禍はチャクラムを投げ、再びユードリアを攻撃し
「ふんっ」
ユードリアはそれを避ける
その瞬間。ルードリアはただならぬ嫌な予感を感じた。
澪禍が狂ったように笑う。
「あはははははは。もうこれであんたもおしまいだ！」
ユードリアは自分のまわりに黒いモヤモヤと、まるで神を蝕むかのような、血のように紅い魔法陣を展開させる
（しまった！）
ユードリアは思う。
これは、創造神のつかう神の処刑呪文『神の悲劇』
どうしてこの子がこれを？
いやまって、この子は・・・

創造神の神子じゃないの

ユードリアは理解する。
澪禍は創造神の技を使うことができるのだ
今のところはごく一部だが、時がたてばいずれはすべてを使えるだろう
創造神に伝えなきゃ・・・。

「葬送立体（キュービックパレード）！」
澪禍が叫んだ
すると、いたるところから黒い触手のようなモノがウネウネと湧きだし、
そして、黒い炎をあげる。

それは、奇しくも火葬のような、まるで神を弔う炎のような
あまりにも寂しい火だった

「澪禍！！」
駆けつけた春乃が叫ぶ。
まわりを見渡せば黒き炎に焼き殺された神々の死体と、首から下がない死体。
辺り一面に腐臭と生物が焼き焦げるような悪臭が充満し
その中に一人、たった一人で立ち気味の悪い笑みを浮かべる澪禍。
ユードリアはすでに力つき、のこるものは絶望へと落とされる。

光が闇に負けた、歴史に残るような瞬間だった

だが、よく見れば澪禍以外にも立っている者がいた
ラウアであった。狼のような耳と尻尾、灰により薄汚れた白髪に、
憎悪の念が込められた余りにもまがまがしく光る紅き瞳。
だが、もう遅い。と言わんばかりに澪禍は術式と禍による枷を展開し、動きを押さえ、異世界と言う名の神々の箱庭へと転移させる。
その瞬間ラウアには絶望と希望の入り交じった光が瞳に宿る
一体何に希望するというのだろう。もう、破滅しかないのに。
春乃は思ったが、ふと気がついた。
澪禍が正気に戻ってきている？
何となく思う。

あまりにも邪悪なオーラが立ちこめる破壊の神。
悪魔。死神などとは比べ者にならないほどの尋常じゃない力
ただ、その力が、何となく邪悪さを失ってきているような気がした。
「澪禍？」
声をかけてみる
「ん？何？春乃」
至って普通。
「いや。まわり見ようよ。死体だらけだよ？」
「ほんとだねぇ・・・。」
澪禍はふと、考えるような仕草をして
「消しちゃえっ♪」
死体を抹消した

「よくやってくれたものじゃ。我が神子よ」

どこか遠くから、威厳に満ちただがなおかつ愛がこもった声が、二人の元へ届いた

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6427t/

傍観少女の異世界観察記

2011年10月30日09時58分発行